

**第一問**

次の文章は、大橋良介おおはしりょうすけ『日本的なもの、ヨーロッパ的なもの』(一九九二年初出)の一節である。これを読んで、後の問い(問1〜7)に答えよ。なお、出題の都合上、本文を一部変更した箇所がある。

日本近代およびアジア近代が、一方では驚異的なテンポで西洋の科学技術を自己のものとなし、これを発展させながら、他方でそれによって自らのアイデンティティの問題を誘発するということは、何を意味するだろうか。

科学技術は地理的・空間的な差異を極小化させ、文化的差異を水平化し、全地球を均一化する。それに対して文化は、地域の特性や伝統とむすびつき、本性上ローカルである。しかし、まさにそれゆえに、個々の文化世界のアイデンティティが問題となるのである。それも、科学技術が内発的には成立してこなかった「非ヨーロッパ世界」において、特にそうである。

明治の日本において、文明開化の酔いの中で、ここはどこだろうという問いが頭をもたげても、不思議ではなかった。日本近代を貫く近代化という流れの水面下に、脱西洋化という深層流が生じたのは、当然でもある。

(略)

科学技術は地域や民族の差異を越え、それゆえにヨーロッパに生まれたという出自の制約を抜け出て、全地球に広がった。その普遍性は、すべてを均等に切りそろえる刃物のような硬さをもって地域文化を水平化し、生活空間を均一化し、社会システムを一元化していく。その傾向は「硬い普遍性」をもっている。

それに対し、文化は特定の地域の伝統や民族のエトス(註1)に育まれるものとして本性上ローカルな性格をもちながら、しかもある「<sup>A</sup>柔らかな普遍性」を含んでいる。文化の柔らかな普遍性は、究極的には宗教の普遍性にあらわれるといつてよい

であろう。宗教はかならずその発生地ローカルな神観念や自然観と密接にむすびつき、民族宗教的でありながら、しかも人間の生死にかかわる事柄として、大なり小なりユニヴァーサルで世界宗教的な側面をもつのである。

簡単な言い方をすれば、ヨーロッパにおいては、科学技術の硬い普遍性と文化の柔らかい普遍性とは、緊張をはらみながらも、根本的には対立することなく、いわば同心円をなしたのである。それは科学技術が自らの精神の自発自展だったということと同じである。厳密に言えば、「技術」を受け入れるジバン<sup>ア</sup>に文化のエトスがふくまれる以上、技術それ自体は必ずその内に「柔らかい普遍性」を含むはずである。一元性の硬さは、厳密には技術ではなくて科学に<sup>イ</sup>キせられる。ヨーロッパでは、科学の思考が自らの精神そのものに<sup>はいた</sup>胚胎していたがゆえに、文化の柔らかい普遍性と科学技術の硬い普遍性とは、あらゆる対照にもかわららず同一の世界を形成したといえる。

そのことは一見普遍的に見えたヨーロッパの世界が、実はひとつのローカルな地域であることを意味する。もちろん科学技術によって可能となった物質的「文明」が「文化」の精神性を脅かすという危機意識は、いろいろな思想家において表明された。しかしそれは、ヨーロッパ精神の内部での危機意識にとどまっていた。<sup>B</sup>それはどこまでも「自己」批判であり、その自己のうちに非ヨーロッパ世界という「他者」を含むことはなかった。

それに対して、日本近代がヨーロッパ近代の受容をともなつて成立したとき、両者は同心円を形成するわけではなかった。硬い普遍性と柔らかい普遍性とは、いわばそれぞれの中心をずらして併存しつつ、同一のエポック<sup>注</sup>を形成したのである。あるいは、柔らかい普遍性がいろいろの中心を併存せしめ、そのひとつとして科学技術をも内につつんだのである。その多中心的な複合構造が、自己同一性を基本とするヨーロッパ近代と日本近代の構造上のちがいだともいえる。

わかりやすい例をひとつ挙げよう。<sup>注</sup>火薬の発明により戦争の仕方が一変したことは、周知のとおりである。それは、洋の東西において同じである。しかし<sup>ウ</sup>サイにみればどうか。ドイツの文化史家フリーデル<sup>注</sup>がその名著『近世文化史』の中で指摘したように、火薬の発明によって人間のあり方が変わった。「騎士」は「兵士」になったのである。自分の名をもち、

名を名乗ることによって戦いを始め、自分と自分の家門の名誉を何より重んじた騎士の武芸は、鉄砲の前には兎戯に等しいものとなり、それに対抗すべく騎士は兵士となった。人間はそれによって、鉄砲とおなじくひとつの部品として調達される、代替可能な存在となった。

ヨーロッパの封建制度において、騎士と主君とをむすびつけていたものは契約の精神である。その契約の精神は、源をさかのぼれば旧約聖書の、神がユダヤ民族と交わした契約にたどりつくであろう。契約とは、主体性をもつ者同士がむすぶルールである。相手とルールをむすぶということは、相手を客体的な他者として吟味し見定めることであり、自己を主体として主張することである。互いの実行とその結果とを検証することである。契約の精神にふくまれる客体化、吟味、検証といった作業は、そのまま、火薬を発明した科学技術の実証的精神と根本では性格を同じくしている。その精神は、騎士が兵士となったときにも変わらず、否、むしろ近代的装備をとってさらに自己展開したのである。

騎士から兵士への変化は、フリーデルの指摘にもかかわらず、本質的な変化ではなくて、同じヨーロッパ精神のメタモルフオーゼにすぎなかった。騎士を生んだヨーロッパ中世と火薬を生んだヨーロッパ近世とは、同心円を成していたのである。

それに対して、日本では事情は異なっていた。武士は火薬の発明以後に、代替可能で匿名の兵士というあり方を兼ねつつも、武士というあり方を失わなかったのである。日本の「武士」は別のエトスの中で生きていたからである。

武士と主君とをむすびつけたものは、解消可能な「契約」ではなくて、領地を媒体とした共同体意識である。そこでは自己の主体性を主張し、他を客体として吟味するという姿勢はない。暗愚の主君だから仕えることを止めるといえば、ヨーロッパの契約の精神からすればあり得るが、日本の武士道<sup>(注5)</sup>の精神では理にそむく。主君に仕えるということは、自分の主体的決断でなされることではなくて、自分の決定以前のことなのである。そこでは、主体性の確立よりは自我の滅却が尊ばれる。そういう武士にとって、火薬や鉄砲は文字どおり舶来の武器である。彼らは、その舶来の武器を駆使するよう

になった。

しかし武士はそれによって戦争の仕方を一変させはしたが、武士であることは止めなかった。織田信長は鉄砲によって武田勝頼の騎馬軍団を敗走させたが、しかし勝者も敗者も武士でありつづけた。ヨーロッパ精神の形態としては、近世以降、騎士道の精神がとくに過去のものとなったのに対して、日本では江戸の泰平の世になっても、武士は泰平の世なりに武士道を守ろうとした。

明治以後、この武士道は天皇への忠誠という国家主義のイデオロギーに最後には組み込まれてしまったが、なんらかの(注6) アクチュアリティを保ちつづけた。(注7) 新渡戸稲造の著書『武士道』は、精神史上のひとつのドキュメントでもある。古典的な武士道と近代の文明開化の精神とは、中心をずらしつつ共存し、日本近代のそれぞれの層を成したのである。

(注8) 「企業戦士」という語は、かつての高度成長の頃の猛烈サラリーマンを指す語として、今では死語となったが、その語の中にも武士のエトスの残響があった。企業とは契約の精神で成り立つ場であり、資本の論理を根幹とする近代世界である。そういう場にも、自我を滅して忠誠をつくすべき「主君」を会社に見立てるといふ図式が成り立っていたのである。

<sup>D</sup> 経営を通して人間形成をめざすというようなモットーを社長室の額に入れておくということは、ヨーロッパのビジネス社会では考えられないが、日本では、さして奇異に思われない。そこには武士道とはいわずとも、これと根を同じくする日本的なエトスが作用していたと、言わざるを得ない。同じ人間が武士でもあり兵士でもあり得たというのとおなじ複合的構造が、日本近代の完熟期には、昼のオフィスでの仕事と夜のつきあいといった仕方で作用していたのである。

(注) 1 エトス——あるものの基底にある精神や特質。「エトス」ともいう。

2 エポック——時代。

- 3 火薬の発明——火薬の発明は、9世紀初頭の中国とされている。ここでは火薬の改良・実用化を指すものと考えられる。
- 4 フリーデル——エゴン・フリーデル（一八七八～一九三八）。
- 5 メタモルフォーゼ——変化。変身。
- 6 アクチュアリテイ——現実味。
- 7 新渡戸稲造——日本の教育家、思想家（一八六二～一九三三）。『武士道』は一九〇〇年にアメリカで刊行された。当時の日本の道徳観を解説したもので、世界的ベストセラーとなった。
- 8 企業戦士——日本において、企業の利益のために熱心に仕事をこなす社員を意味する言葉。日本の高度経済成長を支えたとされる。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが 1、イが 2、ウが 3

ア ジバン

- |   |                 |
|---|-----------------|
| a | バ ネンの作品を展示する    |
| b | ピ アノのバ ンソウを依頼する |
| c | バ ンジャクな体制を築く    |
| d | リ ンバ ン制を導入する    |

イ キ|せられる

- |   |                |
|---|----------------|
| a | 恒久平和をキ ネンする    |
| b | 氏名をキ サイした用紙    |
| c | 母校にピ アノをキ ゾウした |
| d | キ タクするのが遅くなった  |

ウ シ|サイ

- |   |                  |
|---|------------------|
| a | シ キ サイが豊かな絵画     |
| b | サ イ キンによる食中毒     |
| c | 石 灰 岩をサ イ クツする鉦山 |
| d | 新機能をトウ サ イした車    |

問2 空欄  に補うことばとして最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は  4

- a あたかも
- b ねがわくは
- c かならずしも
- d あわよくば

問3 傍線部A「『柔らかい普遍性』」とあるが、なぜこのような言い方をしているのか。その説明として最も適当なもの

を、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は  5

- a 文化は人間の生活にかかわるものであり、時代や場所によって大きく異なるものであるが、人間がもつ神観念や自然観は世界的に共通しているものだといえるから。
- b 文化は人間の生活にかかわるものであり、これまで地域によって大きく異なっていたが、科学技術が世界的に広がったことにより標準的な文化のあり方が定まってきたから。
- c 宗教は人間の精神にかかわるものであり、時代が移るにつれてその宗教がもつ神観念や自然観は変化するが、その宗教を信じる者の間ではいつの時代も変わらない共通の価値観が存在しているから。
- d 宗教は人間の精神にかかわるものであり、その宗教が生まれた場所の特性を反映しているが、生と死という人間がいつの時代でもどこの地域でも直面する事柄にかかわるものでもあるから。

問4 傍線部B「それはどこまでも『自己』批判であり」とあるが、これはどのようなことを言っているのか。その説明

として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **6**

a 科学技術によって可能となった物質的「文明」が「文化」の精神性を損なうのではないかと心配されたが、「文化」のもつ精神性は地域の特性や伝統にむすびつく強固なものであり、科学技術の影響を受ける恐れはないため、そのような心配を口にする必要はないということ。

b 科学技術によって可能となった物質的「文明」が「文化」の精神性を損なうのではないかと心配されたとおり、ヨーロッパ生まれの科学技術はそれぞれの地域に根付く「文化」とことごとく衝突してしまい、近代化は行われるべきではなかったと否定的に捉えられているということ。

c 科学技術によって可能となった物質的「文明」が「文化」の精神性を損なうのではないかと心配されたが、科学技術は「文化」と対立するものではなく、相互に影響を与えあうものであり、物質的「文明」によって「文化」の精神性はむしろ強固になったということ。

d 科学技術によって可能となった物質的「文明」が「文化」の精神性を損なうのではないかと心配されたが、科学技術はヨーロッパ文化に端を発し、その精神に育まれてきたため、科学技術に対して抱かれた懸念はあくまでヨーロッパ内部の問題に過ぎないということ。

問5 傍線部C「契約の精神」についての説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は 7

a 主君が騎士を代替可能な存在とみなしその能力を吟味し見定めたくえで、主従の契約を結ぶことにより培われてきたヨーロッパ中世における「契約の精神」は、火薬の発明により鉄砲を手にした騎士が兵士として大きな力を持つようになったことで変容した。

b 主君が度量を示し騎士の主張する要求を受け入れて契約を結ぶことを重要視していたヨーロッパ中世における「契約の精神」は、火薬のように危険な技術であっても必要性があれば開発を進めようとする科学技術の精神と類似性が認められる。

c 騎士と主君が要求をぶつけ合い吟味して見定めた上で契約を結び、互いにその働きと成果を検証してきたヨーロッパ中世における「契約の精神」は、戦争において破壊力をもつ火薬を発明するために実験を繰り返した科学技術の実証的精神と共通している点がある。

d 騎士と主君の契約が神の命じるところによって結ばれているため、疑われることなく継続してきたヨーロッパ中世における「契約の精神」は、火薬の効果の実験など物事の有効性を検証する科学技術の出現によって再検討された。

問6 傍線部D「経営を通して人間形成をめざす」というようなモットーを社長室の額に入れておくことは、ヨーロッパのビジネス社会では考えられないが、日本では、さして奇異に思われない。」とあるが、これはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **8**

- a 資本の論理では契約を通して企業と社員が結びつくはずなのに、日本の企業には社員は主体性を確立するよりも自我を滅却して会社に仕えることが必要なのだという共同体意識が残存しているから。
- b 企業は本来契約の精神で成り立つ場であるにもかかわらず、日本の企業には未熟な社員を個人としての主体性をもてるように社長が教え導かなければならないという意識が入り込んでいるから。
- c 日本の企業では社員の主体性の確立が十分に進んでおらず、それぞれの企業が有する社訓を守っていれば自分で判断を下さなくても経営が成り立つと思込んでいるから。
- d 日本の企業では会社を主君に見たてるほど社長の権力が強いいため、日々忠誠を誓う場である社長室の額に標語を掲げていれば自ずからその理念が浸透すると日本の社長は考えているから。

問7

筆者の考えに合致しないものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **9**

a 日本人は明治時代に文明開化を迎え、西洋から日本に入ってきた科学技術を自分のものとしようとしてきたが、近代化の流れの中でそれに対する違和感を心の奥底で感じてきた。

b 中世ヨーロッパの騎士が近代に至って代替可能な兵士に変化を遂げたのは、科学技術の実証的精神が重要視されるようになり、人間のあり方が一変したためである。

c ヨーロッパと日本では、暗愚の主君に対する仕え方が大きく異なり、日本の武士道精神からすれば、主君が暗愚であることを理由として仕えるのを止めることは理にそむくことになる。

d 日本人は、日本の精神的な文化と西洋の物質的な文明とどう折り合いをつけるのかということに葛藤しており、そこに「非ヨーロッパ世界」である日本のアイデンティティが存在する。

## 第二問 次の文章は、民間伝承の調査を通して、主として一般庶民の生活・文化の発展の歴史を研究する学問である民俗

学について述べたものである。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、出題の都合上、本文を一部変更した箇所がある。

学史のなかで、日本の民俗学は、自身の日常とは必ずしもいえない問題に取り組む姿勢が一般化した。それは研究者が生活者としての自己を記述対象としては後景化させていく過程となった。また、研究者が調査対象者とともに、ひとしく絡めとられている何か（すなわち、世相）への関心をキ<sup>ア</sup>ハク化させていく過程でもあった。他方で、民俗学には、柳田の提唱した「自己内省」というキーワードも継承されていた。研究者の生活者としての側面が問われず、フィールドで出会う人びとの研究を、それでも「自己内省」と称するのであるから、「自己」の境界が最大公約数的で超時間的な次元にまで拡張されてしまうのは自明である。柳田の学問が胚胎<sup>はいたい</sup>していた自文化研究の芽は、自己を基点とする研究ではなく、自国研究としてのみ展開していくことになる。研究対象となる人びとは「常民」と名づけられ、それは「民俗」の担い手であると規定され、「民俗」を伝統的生活文化に固定する流れのなかで、民俗学は自国内のそれらを研究することに傾斜し、変転著しい現代人の自己像理解から果てしなく遠ざかっていった。

（略）

自己・日常・世相を民俗学の視点として実装することで見えてくるものを、筆者の最近の研究に則して検討してみよう。近年、筆者は都市生活における害虫の研究に取り組んでいる。その動機は、「虫が嫌いな私」の「現在」を世相史的に考えたいというものであった。筆者が彼等を恐れる状況がいかにして発生したかを解き明かしたいということである。もつとも、それが解き明かされたとして、筆者が害虫を恐れる気持ちは消えてなくなりはいししない。しかし、虫に対してきわめて情緒的に反応し、身勝手に不寛容な態度をとる「私」というものがありありと照射されるテーマであり、かつ、「私」とい

う個人の感性や性向にのみ還元できない問題であることが見えてくる。調査を通して人びとの害虫体験を知ると、どうやら筆者の態度や感覚が、まったく孤立したものではないことが知られる。害虫をめぐる世相史のなかに、筆者の様々なふるまいがあるということが見えてくる。

家庭ごとの虫への対応が相似しつつも多様であることは拙稿で紹介している。各家庭におけるゴキブリへの対応には、専門家によって発信された知識の影響がうかがえる。商品として販売されている予防・駆除グッズを使用する家庭も多い。科学知識や科学技術の日常への浸透の問題である一方、その誤った受容や俗的なアレンジがある点に、この問題の民俗学的な面白さがある。誰もが同じように殺虫スプレーや液体洗剤をつかってゴキブリを駆除しているようであり、それらのヴァナキュラーな次元がみえてくるのである。そして、そのような俗的な対応のなかに、今日の害虫観とその歴史性を考える手がかりも見えてくる。

殺したゴキブリをトイレに流す人たちがいる。なにを隠そう「私」もその一人である。調査を開始するまで、同じことをしている人がいるとは思っていなかった。<sup>B</sup>「私」の感覚は、限られた範囲ではあるが、相応に「私たち」の問題として位置づけなおしても良さそうである。では、なぜ、トイレに流すのか。自身の領域内の（衛生的な）秩序を、今日の「私たち」は生活圏の外部に依存して成り立たせているわけだが、身近にあつて嫌なものをそうした仕組みに託して処理しようとする感性は、農耕儀礼であるところの「虫送り」<sup>(注4)</sup>にも重ねて考えたいところである。虫送りがまた、秩序の維持を領域の外部に依存しているからである。

領域意識という観点から害虫を取り上げてみると、衛生害虫や不快害虫の類は、その領域侵犯が深刻な問題に移行したことで、不快視されている側面があることがみえてくる。かつての開放的な家屋に暮らしていた話者は、飛来することが自明の虫に、特段の注意を払ってはいなかった。それが「異物」のように思われるのは、越えてほしくない線があり、それを彼らが飛び越えてくるからである。もちろん、それは昨今の虫が節操をなくしたのではなく、「私たち」の側が境界

線を嚴重にしていったと考えるべきである。一般的な家屋構造は、恒常的な開口部を減少させる傾向にある。ゴキブリの家庭害虫としての台頭は、そうした住生活の変容と  なるものであった。また、彼らの台頭以前の害虫の最たるものは「蚊」であったが、蚊に対し、以前にはどのように防衛線が張られていたかといえば、蚊遣火や蚊取り線香で追い払うのではなく、蚊帳のなかに立てこもることでわが身を守っていた。窓を開け放ちつても虫たちとの接触を避けようという発想は、アルミサッシ普及後は網戸によって実現される。籠城という戦略を、「私たち」は知らず知らずのうちにとってきたといえるのかもしれない。外部に対して閉ざされた近年の住生活において、ハエ・蚊の飛来は日常のリスクではなくなったが、ゴキブリは換気扇やエアコン、排水溝、時折開け放たれる玄関から侵入してくる。換気扇は、家屋が気密性を増すなかで新たに必要性が生じた設備であった。

住まいの世相史に今日の暮らしと害虫との関係を考える手がかりがある一方、彼らの命を奪うあり方にも、世相史的に考えるべき側面がある。ゴキブリは、基本的には、各家庭でその成員が駆除している。その家のゴキブリなのだから、当然ではある。その一方、ゴキブリと同様に新たな害虫として台頭したスズメバチは、各家庭で駆除することが推奨されてはいない。命にかかわる刺傷被害があるからであるが、駆除の責任は各家庭に担わされている場合が多い。キイロスズメバチの都市部での営巣が問題化したのは一九八〇年代以降と概括して良いだろう。各地自治体に駆除依頼が殺到したし、現在も駆除に対応してくれる自治体がある。もともと、キイロスズメバチへの対応史を再構成してみると、全体の動向として、駆除業務から自治体が後退していく過程がみえてくる。職員による直接駆除から業者委託へ、または補助金の交付へという流れをたどり、一切の対処をしないかたちに変化した例も確認できる。民間が対応できるものは民間で、ということであろうが、事業を廃止する自治体からは、スズメバチの巣の駆除は土地所有者の責任で行うべきとの解説がなされる。私費で駆除業者に依頼せよというわけである。営巣箇所が私有地内である場合、所有者が行うべきとの理屈はわかる。しかし、自宅にスズメバチに巣をかけられることは個人が責任をとるべきことなのか、それを駆除することは各家

庭が行うべきことなのかは、社会的に議論を尽くすべき問題とも思う。スズメバチは戸外に営巣し、通行人を刺すこともある。つまり、被害は公共の領域でも発生する。また、スズメバチの都市への進出には、開発などに起因する環境変化が相応に作用している。

有害視される虫や動物たちの生態は、さまざまな問題を公的な課題と私的な課題に弁別していく社会のかたちを照射する。そして、かつてハエ・蚊の駆除が「共」の問題として、住民運動的に行われていたことを改めて想起させる。「公」「共」そして「私」をめぐる意識変化の過程も、害虫の世相史からはみえてくるのである。

また、九〇年代をピークに問題化していたカラスの大発生は「公害」のメタファー(注5)で語られた。環境変化とゴミ問題に起因して激増したカラスは、行政が徹底的に駆除したことで、生息数が劇的に削られ、今日に至る。賛否の声があがったことは言うまでもないが、駆除は現在も継続している。スズメバチもカラスも、都市空間に適應したに過ぎない。新たな自然環境への適應を拒んだのは、「私たち」の側であったことも忘れてはならないだろう。都市に自然を取り戻すことは美しく語られる。しかし、そこで夢想される調和は、私たちの生活をジューゼンイどおりに保ったうえで、ということが前提であるらしい。害虫や害鳥から見えてくる問題は、「私たち」がなにかを有害視する認識、そして、それらを取り除けようとする歴史的過程、そして、それらを通して実現させようとしている「理想の暮らし」のかたちだといえるのである。

ゴキブリが嫌いで、スズメバチがとにかく恐ろしく、カラスの飛び交う早朝のハンカ街ウをうんざりしながら歩いてきた「私」の体験や「日常」の営みは、各種の生活変化の折り重なるなかで行われており、それが孤立したものでない点において、世相史の一コマを構成する。また、これらについて考えることは、それとは自覚していなかった「私」のかたちを、むしろ照らし出す。伝承や民俗では説明できない「私」の生活がここにある。また、「私」の意思や記憶や感情は、誰とも分かち合えないのと同時に、「私」を越えて存在する各種の脈絡に規定されている。だから「私」は「私たち」として問われ得る。

(おいかわ 及川 しょうへい 祥平「自己・世相・日常―現在を史学する視点」による)

(注) 1 柳田——やなぎたくにお柳田國男。民俗学者(一八七五―一九六二)。それまでの文献資料を重視した歴史学を批判し、一般

の人々の生活や文化の記録を研究資料とする民俗学を提唱した。

2 拙稿——自分の書いた原稿をへりくだって言う語。

3 ヴァナキュラーな——その時に固有の。

4 虫送り——農作物に被害を与える虫を追い払い、豊作を願う行事。

5 メタファー——隠喩。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが10、イが11、ウが12

ア キ|ハク

- |   |               |
|---|---------------|
| a | スウキ な運命をたどる   |
| b | 戦争のシユキ を読む    |
| c | 見直しのキウン が高まった |
| d | 平和をキ キユウする    |

イ ジユウ|ゼン

- |   |               |
|---|---------------|
| a | 他のツイジユウ を許さない |
| b | クジユウ の決断をする   |
| c | 予算をジユウ トウする   |
| d | 二日に及ぶ山のジユウ ソウ |

ウ ハンカ|

- |   |               |
|---|---------------|
| a | タンカ で負傷者を搬送する |
| b | カ ビな服装を控える    |
| c | 輸入ザツカ を取り扱う   |
| d | 工場をカド ウさせる    |

問2

空欄

に補うことばとして最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は **13**

- a ステレオタイプ      b パラレル      c エゴイスチック      d ヒューマニズム      e ネガティブ

問3

傍線部A「害虫をめぐる世相史のなかに、筆者の様々なふるまいがあるということが見えてくる。」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **14**

- a 害虫体験についての筆者の様々なふるまいは、身勝手に不寛容な態度をとる「私」の個人的な感情によるものであるが、歴史的に多様である害虫への対応をみるとそのような個人的な行為も納得できるということ。
- b 害虫体験についての筆者の様々なふるまいは、研究者である「私」が生活者として記述対象になることもあるため、伝統的な生活文化を理解するために必要不可欠なものとして位置づけられるということ。
- c 害虫体験についての筆者の様々なふるまいは、それぞれの家庭の日常生活のあり方に裏づけられているという点で、日本における害虫観を理解し生活を改善していく手がかりになるということ。
- d 害虫体験についての筆者の様々なふるまいは、日常に浸透している科学知識や科学技術に則りながら、俗的な対応をしているという点で、人々が害虫に対応してきた歴史のなかに置くことができるということ。

問4 傍線部B「『私』の感覚は、限られた範囲ではあるが、相応に『私たち』の問題として位置づけなおしても良さ

そうである。」とあるが、なぜそのように言えるのか。最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は15

a 嫌なものを生活圏の外に排除しようとする「私」の感性は、領域内の秩序を維持しようとする意識によるものであり、「私」を含めた人間の住生活の境界線を厳重に守る領域意識の変化の問題として捉えられるから。

b 不快視される側面を持つものを排除しようとする「私」の感性は、開放的な家屋に暮らしていた頃の「私」には認識されていなかったが、籠城という戦略をとる現在は明確になってしまったから。

c 害虫を異物であると考える「私」の感性は、かつての「虫送り」の農耕儀礼にも当てはまるものであり、一般的な家屋構造が開口部を減少させる以前から、伝統的な生活文化の中に存在していたから。

d 領域内の秩序を強く意識する「私たち」の感性は、閉ざされた住生活を営もうという戦略に繋がり、虫との接触を避けようとする思いから嫌なものは何でも生活圏の外に排除することになったから。

問5 傍線部C「彼らの命を奪うあり方にも、世相史的に考えるべき側面がある」とあるが、これはどのようなことを

言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **16**

a 虫や動物たちを有害視し駆除する方法によって、新たな自然環境である都市空間に人間が適応していく歴史的過程が詳細に映し出されているということ。

b 虫や動物たちを有害視し駆除する方法によって、社会の課題を私的なものと公的なものに区別したうえで、決しようとする私たち人間の暮らしのかたちが見えてくるということ。

c 虫や動物たちを有害視し駆除する方法が人間の領域意識の変化を引き起こし、家屋構造における開口部の減少という傾向をもたらしたということ。

d 虫や動物たちを有害視し駆除する方法によって、家屋構造が気密性のあるものへと変化せざるを得なかったのは、都市空間における害虫の危険性が拡大したためであるということ。

問6 次に示すのは、本文を読んだ後の話し合いの様子である。これを読んで後の(1)～(2)の問いに答えよ。

教師——柳田国男の提唱した「自己内省」について説明すると、「内省」は、自分の考えや言動などを深くかえりみることという意味です。離島の漁村を例にすると、その生活や文化を理解するために、自分を漁村の人間として置き換えようと、自分に先入観があることを理解し、それを排除した上で客観的に研究を進めることになり  
ます。また、「自文化研究」というのは、研究者が自分自身の文化や社会を対象にして研究をすることを言います。

生徒A——筆者である及川祥平は、柳田の民俗学の研究に関して「『自己』の境界が最大公約数的で超時間的な次元にまで拡張されてしまうのは自明だ」と言っている。これは、X。

生徒B——こうした取り組みが、日常生活の中で見過ごされがちな事実や変化に目を向けることになったんだね。その意味で、及川の都市生活での害虫の研究は、柳田の考え方と共通するよね。害虫から日本史や世界史をとらえ直すと面白そうだね。

教師——柳田の研究では、当時の生活だけでなく、伝承についても調査しているんですよ。河童かっぱのような妖怪など、その地域の言い伝えや昔話も調査しているということですよ。

生徒C——及川は古くからある慣習や風俗、信仰、伝説、技術、知識などの文化遺産という伝承について、ここでは触れていないよね。研究者である自分を「虫が嫌いな私」として調査対象としているよね。

生徒B——ただし、及川は「私」と「私たち」を区別して扱っているよね。「私」は、歴史的変遷の中の「私たち」の影響を受けているという意味で、「私たち」には、時間の流れがあるんだね。

生徒A——なるほど、及川が本文の最初の段落で「変転著しい現代人の自己像理解から果てしなく遠ざかっていった」と述べているのは、柳田を批判する面もあるんだね。

生徒C——ふたりとも民俗学の担い手として、調査を色々な場所で行い、人から伝え聞いたことなどをまとめている  
と言えるけれども、Y。

(1) 空欄 X に入る発言として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は 17

a 研究者としての柳田の生活だけでなく、漁村などフィールドで出会う人びとのことを調査対象とすることにより、フィールドで出会う人たちの生活と自分の生活を比較検討するということなんだね。柳田は自分自身の生活を見つめ直してみなかったということなのか

b 漁村の人びとなど、柳田がフィールドで出会う人びとのことを調査対象とするだけでなく、自分も実際に調査対象となる地域の人びとの生活を体験してみるということなんだろうね。これにより、当時の漁村などの生活の大変さを感じ取ることを重要視したんだね

c 柳田がフィールドで出会う人びとのことを調査対象とすることにより、柳田とフィールドで出会う人びとが民俗学の担い手になるということなのか。柳田の研究が自国の研究へと展開していったのは、人びとの日常生活そのものに普遍性があるのとらえ、それを文化としてみていたからなんだね

d フィールドで出会う人びとのことを調査対象とすることにより、柳田自身が研究者として調査をする難しさを感じていたんだろうね。民俗学として生活や文化を研究するために、漁村などの人びとにどのようなふるまいをすべきかについても考えていたということなんだね

(2) 空欄 Y に入る発言として最も適当なものを、次の a～d のうちから一つ選べ。解答番号は 18

- a 時代の変化を追いかけず伝統的生活文化を集合体としてみている柳田に対して、及川は虫駆除を例に取り上げつつ、日常の営みは人々の生活環境や自然環境の変化とともに移り変わってきたと見ているんだよね
- b 伝統的な生活文化を普遍的で高尚なものにとらえている柳田に対して、及川は虫駆除の習慣を例に挙げて自分の生活を振り返りつつ、現代人の生活が私的で低俗なものへと変化していることを指摘しているんだよね
- c 自己内省を行うことで人びとの生活が集合体として明らかになると考える柳田に対して、及川は虫嫌いの理由を分析することを通して、身勝手に不寛容な自分自身の性格が改善されると考えているんだよね
- d フィールドワークを行い実体験を重視しながら地方の研究に力点を置いた柳田に対して、及川は害虫が嫌いな研究者としての立場から、現代の都市生活がどのような文化なのかを解き明かしたいと考えているんだよね